

‘09 春

4 日目：川内～水俣 65km

最終日：水俣～田浦 32km

< 只者だ >

4 日目の川内～水俣 65km は、パーフェクションだった。朝 5:00 にホテルを出て、阿久根、出水を通過して熊本県入りし、水俣には 15:30 に着いた。疲労の色が濃く、まともに走れる状態ではなかったが、とにかく前に進み続けた。この間、大休止(20 分以上)1 回、寸休止(3 分以内)を 10 回程取り、小休止(10 分前後)は無しだった。

気温が高くかなりへバツたが、5 日の内 1 日ぐらいはシベアにやっておかないと、「お前、何やっちょんのか、たらたらしとんじゃねーぞ！」と言われかねない。たまには、目にものを見せとかんとね。

ただ、こういう風に前ばかり気にして進むと、周りを眺めるゆとりがなくなり、道中の印象はほとんど残っていない。これでは、ジャーニーランとは言えない。やはり、チンタラタラリンやって行かなければならないワケだ。ものすごく勿体ない一日だった。

閑話休題、水俣でもスーパーホテルに泊まり、近くの居酒屋で、極上の馬刺しと不知火海のタコのぶつ切りに舌鼓を打つ。ここでも、いい食に出会えた。

ホテルに帰る道すがら空を見上げると、雲行きが怪しい。天気予報に因ると、今夜半から風雨が強まり…、だそうだ。今日のパーフェクトに加え、明日、風雨をもものともせず、水俣～宇土 75km をやっつければ、「只者ではない」となるのだが、雨にカラキシ意気地のない私は、期待に違わぬ「とっても只者」だった。

この春は、初めから水俣まで届けば御の字と思っていたし、スーパーホテルのうまそうな無料の朝食に憧れてもいた。この絶好のチャンスを見逃す手はないと考え、明朝は 8:00 出発と即決した。フロントのオネーさんに、八代付近の日奈久温泉の所在を訊き出し、最終日は、日奈久までの 40km と定めた。後は、寝心地の良いスーパーホテルのベッドにバタンキューするだけだった。

翌朝 6:00 に目覚めると、外は吹き降りだった。身支度を済ませ一階に下りると、朝食の準備ができています。和洋食、質量とも十分なバイキングだ。これが無料だとは嬉しい限りである。30 分かけて、しっかり腹ごしらえをした。

玄関を出ると、ずいぶん時化ている。このまま部屋に戻って、もう一眠りしたいという誘惑に駆られるが、「ええい、儘よ！」と振り切って一步を踏み出した。

右踵が痛くて、ビッコを曳きながら歩く。今日はもう走れないだろうと観念した。止まらないだけでもまだまし、というシチュエーションだった。

横殴りの雨には、簡易カッパもさほど役にはたたず、2.5km 行った所にある新水俣駅で、早くも休憩だ。雨脚が弱まるまで、30 分程待った。

新幹線の駅のトイレは、どこも広くて清潔だ。ウォッシュレットであることは言うまでもないが、座り心地が良いので、つつい長居をしてしまった。

雨が小降りになったのを見計らって、再出発した。小さな峠を越え、「つなぎ温泉四季彩」という所で、また雨を凌ぐ。美しい景勝地ではあるが、10時前なので人も疎らだった。

津奈木～湯浦までの薩摩街道、約10kmは悲惨だった。国道3号線は、熊本入りすると途端に悪くなる。歩道は左右途切れ途切れで、路側帯も狭い。右側を伝うように進むのだが、対向の大型トラックから水飛沫を何度も浴びせられ、その度に「コンチクショー!!」と悪態をついた。走れない情けなさや惨めさで、涙が出てしまった。

悪戦苦闘の挙句、やっと湯浦に下りてきた。雨も上がる。麓のバス停に佇む老婆に挨拶をすると、「あやあ、兄ちゃん、どこんから来んしゃったと。ようこげん雨ん中、歩いとよね。」と言われた。モロ熊本弁だったので、熊本県入りが実感できた。

湯浦温泉センターの前を通り過ぎる時、「ここで温泉に入って行けば、冷えた体が温まるだろうなあ。」等と考えながらタラタラ歩いていたら、いつの間にか芦北町にやって来た。そこで小国ラーメンの店を見つけ、大休止とした。今日は、休止だらけだ。

店は、プレハブ造りでショボかったが、味はなかなか良かった。大盛りラーメン&ライスを一瞬の間に平らげた。おかみさんが美人なものだから、二重に満足。いい昼メシだった。店は、外観で判断してはいけませんぞ！

エネルギー充填で「さあ行こうかい」といきたいが、今日の重戦車はどもなりやせん。キャタピラーに故障ありだ。

芦北町役場前を通り、さしきトンネルまでの1km上り直線を歩く。路側帯が30cmもなく、右路側帯線の上を進んでいった。対向車がトラックの時は、ガードレールにへばり付いて避ける。ガードレールを背にしてだ。反対だと、バックパックを引っかけられる恐れがある。こういうことを繰り返して、下って来るトラックと闘いながら、這う這うの体でトンネルに辿り着いた。

さしきトンネルは2kmあり、旧式で路肩が一段低い側溝になっているタイプだ。泥や空き缶、割れビンで、汚いことこの上ない。ここは、ゲリラ歩で抜けることにした。ゲリラ走なら、パッパッと走ってサッと避けるから速いが、ゲリラ歩は、ノロノロ歩いてヨロッと避けるから、時間がかかって仕方なかった。

この3km余りの格闘で、私の士気は下がるところまで下がった。道路と並行する肥薩オレンジ鉄道に、いつでも乗れる心の準備OKだ。

肥後田浦を過ぎ、「たのうらおたちこうえん」という長い名前の駅の近くを歩いていると、電車が入って来て止まった。「アッ電車や、いいなあ。乗ってしまえば楽なのになあ。」と思いつつ、発車する電車を指をくわえて眺めていた。そして、何を血迷ったか「念のために時刻表を見ておこう」と言って、クリークを渡り駅舎まで行ったのだ。これが、この旅の幕引きになるとも知らずに。

時刻表には、次の電車は14:40とあった。今13:45だから、1時間後だ。「待っとれん、日奈久まであと10kmだ、行こう。」と気を奮い立たせ、3号線に戻らず、それに沿っているクリークの対岸遊歩道を進んだ。天気も回復し、舗装もきれいなので、ゆっくりと走った。

しかし、500m 程行くと「この先工事中、行止まり」の大きな看板があった。辺りを見回しても、3 号線側に渡る橋はない。さっきの駅までバックしなければならない。「なんでやねん。駅の所に看板出しかんかい、クソツタレが！ええい、止めじゃ、止めじゃ!!」と怒鳴り散らして、路上に大の字になり、青空を見上げた。

何のことはない。心の何処かで、止めるきっかけを探していたのだ。10 分前、クリークを渡って時刻表を見に行かなければ、止めはしなかっただろう。昨秋の古座（けつはディープに）同様、墓穴を掘ってしまった。これで THE END だ。結末はいつも冴えないなあ、有終の美には程遠い。

結局、みさきこうえん駅で 40 分待ち、電車に乗って日奈久駅で降り、1km ばかり戻って温泉に浸かった。そのまま走って行っても、時間的には変わらないはずだが、一旦切れてしまった気持は如何ともし難い。来春、みさきこうえん駅から始めると、中途半端な距離が残ってしまうとも考えたが、来春は来春の風が吹くってか。後悔は来年しやがれた。全くどうしようもない「只者」である。

温泉は、国道沿いにある東湯を選んだ。大、中の湯船がある銭湯で、湯質は、別府鉄輪温泉のをもっとヌメーっとした感じか。¥200 で 1 時間ほど浸かると、気分が爽快になった。

ここの湯は、私はとても気に入った。恐らく、自分の中でベスト 3 入りはするだろう。ひょんなことから知った日奈久温泉、こういう出会いもジャーニーならではだ。偶然では片付けられない、何か運命的なものが感じられた。

最終日の夜は、メに相応しいものだった。宇土で電車を降り、ホテル「ベンデナート」に直行する。フロントで「渡月」という店を紹介してもらい、隠れ家風の潜り戸を潜った。大きなテーブルが一つと、5~6 人が座れるカウンターという簡素な佇まいだった。

気さくな御主人は、何を注文するにも先ず試飲、試食を勧める。馬刺し(タテガミ)をたのむと、「馬が好きならこれはどうですか。牛のレバーは食べられなくなりますよ。」と言って、馬のレバーを出してくれた。確かに、牛レバーの様な臭みはなく、食感がシコシコして美味だった。病み付きになるぞと思ったが、レバーを出す店は、本場熊本でもザラにないそうだ。残念なりだ。

納豆ゴーヤチャンプルーというのも、気に入った料理の一つだった。結構なボリュームで、もちもちとした歯ごたえがたまらない。我が家のゴーヤチャンプルーは、これ以来納豆入りとなった。

うまい酒が全身に沁みわたり、素敵な料理が五感を蘇らせてくれる。温かくもてなしてくれるご主人と他のお客さん達、疲れ果てた心が和んでいくのが分かる。

今回も、途中色々あったが、いい旅だったなあ。「ジャーニーって、やっぱいいよなあ、おまえには苦勞かけるけど。」と、2 倍に腫れ上がった足に語りかける重戦車だった。